

平和を語り伝えるノーモア・ヒバクシャ会館 ～展示品が語る被爆の実相～

北明 邦雄

ノーモア・ヒバクシャ会館の誕生

被爆者協会の物置を捜していたら 1 冊の書類のファイルが見つかった。「事務局長用ファイル」と背表紙に書いてある。北海道ノーモア・ヒバクシャ会館建設委員会事務局長橋本左内さんのものである。橋本さんは北星学園男子高校・北星学園新札幌高校(現在の北星学園大学附属高校)の宗教科の教員だった。残念ながら一昨年に亡くなった。

ファイルの中に「北海道ノーモア・ヒバクシャ会館建設着工の御報告と第二次募金のお願い」というファックス文書があった。1991年6月12日の日付が残っている。会館建設運動の経過がわかるので、少し長くなるが紹介したい(本文縦書き、漢数字は算用数字に直してある)。



ノーベル平和賞受賞を記念して、2024年12月10日、会館の壁面に「核兵器も戦争もない世界を、ともに」と書いた看板を設置した。

喜びの報告を申し上げます！ ご支援と御心をお寄せ下さいました全道・全国そして海外の皆様、1982年10月に始めましたこの運動は、ついに、今年の夏に着工するところへ到達いたしました。運動の当初は、御支持くださいました皆様のお力により順調な進展を見ましたが、建設用地を取得する段階で、行政と3年にわたる交渉も遂に実らないなどの困難がありまして、不本意な年月を費やさねばなりませんでした。

土地の提供者が現れる！ この苦境に、篤志の御婦人より小樽にある宅地を御寄付くださる御申出があり、その地に建てることを御望みでしたが、私共側の諸事情から、この土地を売却して、札幌に好適の土地を求めてもよいとの御配

慮まで頂くことができました。こうして建設用地は札幌市白石区平和通 17 丁目北 802 番 9 号(JR 南口より約 200 メートル)に確保することができました。こうして、今年 8 月に着工し、10 月末に竣工する運びとなりました。

第二次募金をお願い致します！ 皆様よりご寄付いただきました「平和レンガ募金」は約 2,500 万円(活動費を除いて)の内約 2,000 万円で上記の土地を購入することができました。残金と小樽の土地売却代金(約 1,000 万円)では建設資金が不足ですので、第二次募金 = 1,500 万円をお願いする次第であります。「土地が決ったら募金に応じましょう」と約束くださった方も少なくありませんでしたので、よろしく願いいたします。

被爆者の皆さんが先頭に立つ！ すでに、北海道被爆者協会(元・道被団協)では、独自に、被爆者自身ならびに自治体等を対象に 700 万円募金を推進しています。これに呼応して、私たち建設委員会として、残りの 800 万円募金を達成いたしたく存じますので、よろしくご協力をお願い申します。(以下略)

建設委員会は北海道被爆者協会とは別組織として、しかし両者は不即不離の形で活動し続けた。1991 年 12 月 23 日、広島・長崎に次いで 3 番目の原爆資料展示館が、日本で最初の「市民立」の施設として竣工した。会館は 1 F が被爆者協会の事務所、2 F が展示室、3 F が図書室と研修室である。展示室には遺品やパネルなど約 200 点余りが展示されている。展示ケースのひとつにはノーモア・ヒバクシャ会館建設運動の関係資料も並べられている。「平和のレンガをあなたもひとつ」という市民への訴えかけが新鮮である。

ノーモア・ヒバクシャ会館は、被爆者の活動と交流の場であるとともに、平和学習の場、平和の発信基地でもあった。ここではいくつかの展示品を取り上げ、ノーモア・ヒバクシャ会館が、被爆の遺品を通して見学者に何を訴えてきたのか、遺品が示す被爆の実相、その背後にある被爆者の物語を考えてみたい。

※ノーモア・ヒバクシャ会館の建設については下記の 2 つを参照のこと。

橋本左内「北海道ノーモア・ヒバクシャ会館建設のドラマチックな日々のこと」『未来への架け橋 被爆者の証言第 4 集』(北海道被爆者協会、2016 年)

鈴木 仁「北海道での被爆者の記憶とその継承-北海道ノーモア・ヒバクシャ会館設立の経緯」『北星教育と現代 第 8 号』(北星学園キリスト教センター、2020 年)

展示品が物語るもの

① 越智晴子さんの「被爆者健康手帳」

展示室に入って左手すぐのところ、ショーケースの中に越智晴子さんの「被爆者健康手帳(被爆者手帳)」が展示してある。あなたは被爆者であることを認めます、というもので、認めたのは北海道知事である。被爆者と認定されれば医療費はかからない(健康保険料はもちろん納めている)。死亡すると手帳は知事に返却する。越智晴子さんは30年にわたって北海道被爆者協会の会長を務めた。亡くなったとき私たち協会のメンバーは遺族と話し、道から被爆者手帳を「返却」してもらいここに展示することとなった。

手帳のはじめのページには、どういう状況で被爆したか、その後の健康状態はどうかなどが書き込まれている。そして手帳は健康診断の結果を書き継いでいくようになっている。

私は30代の終わり近くに札幌市白石区の越智晴子さんの自宅を訪れ彼女の被爆体験を細かく聞いた。1945年6月、越智さんの家族は神戸に住んでいたが、神戸大空襲で焼け出され西宮の姉のところに移る。7月に広島にいた軍医の兄から、自宅にイギリス軍から押収した薬品があるからそれを持ってきてくれと頼まれ、その薬品を携えて越智さんは広島に向かった。兄の家で1か月ほど過ごし、8月5日に帰ろうとしたがあいにく汽車の切符がとれず6日に帰ることになった。そして原爆の直撃を受けたのである。爆心地から1,700m、がれきの下敷きとなり全身血まみれになった。越智さん22歳の時である。

途中の詳細は省くが、兄も甥も血まみれになった(甥は翌年に亡くなる)。越智さんたちは近くの空き地に避難し、兄、甥は先に救護所に向かった。しばらくして「軍医殿の妹はいるかー」と衛生兵が救助に来てくれる。被爆してひどく傷ついた三人の少女もついてくるが、途中名ばかりの「救護所」と表示のあるところに置いていかざるをえなかった。越智さんの生涯消えな



い“負い目”となる。西宮に帰って間もなく、全身の倦怠感、脾臓の腫れ、白血球の減少などで阪大病院に入院し、「助からないかもしれない」と診断されたこともあった。

結婚して北海道に渡る。今度はわが子と孫に被爆の影響がないか、その不安から離れられない。ある時娘の夫から無事子どもが生まれたと電話があった。越智さんが最初に発したのは「元気でいますか?」という言葉だった(「五体満足?」とは言えなかった)。大丈夫だよ、と聞くと崩れるように電話口に座り込んでしまう。

かろうじて生き延びた被爆者にまでどうしてこんなにも理不尽な苦しみを与えるのかと思い、私は退職したら被爆者の仕事を手伝おうと考えた。私は 2013 年に北海高校を退職し、その年の 12 月から会館に来て被爆者協会の仕事を手伝っている。

越智さんは協会結成時から被爆者の運動に携わり、のち 30 年にわたって会長職を続け、2015 年 12 月、在職のまま 92 歳で亡くなった。最後にお会いした時も「あの子たちは生きていないでしょうね」と繰り返し言っていた。

② 溶けて変形した瓦

展示室には広島原爆資料館から提供された展示品がいくつもある。北海道以外は瓦屋根が一般的だから、この被爆した瓦は原爆の威力を物語る典型的な遺品である。説明文には、

原爆の被害は、熱線と爆風とさらに二次的な火災の効果がからまりあって一層増幅されました。原爆の炸裂とほぼ同時に中心地域の屋並が炎上し、また、倒壊した建物のいたるところから火災が発生し、またたく間に市街地は猛火に包まれました。

瓦の溶ける温度は摂氏 1,200 度から 1,300 度であることから異常に高い温度の火災であったことがわかります。

とある。高温で焼かれた瓦がこのように変形するのである。爆心直下は数千度にもなったと言われるので、「人間は影だけ



を残して消えた」という説明も納得できる。かつて広島の高校生平和ゼミナールの生徒たちはバーナーで瓦を焼き、瓦は何度でどのように変化するのかを確かめる取り組みを行っていた。

問題は、きのこ雲の下で何があったかということに思いをはせることであろう。原爆投下が引き起こした惨劇と被爆者の苦難の歩みは筆舌に尽くしがたい。助けてとも言えず一瞬のうちにこの世から消えてしまった人々、火が迫る中、肉親や友人・知人をどうすることもできず見殺しにして逃げざるをえなかった人々、そしてかろうじて生き延びた後も被爆の後遺症と放射線による後障害発症の恐怖が襲う……。

ノーベル平和賞の授賞理由の「ヒバクシャは、筆舌に尽くしがたいものを描写し、考えられないようなことを考え、核兵器が引き起こす、理解が及ばない痛みや苦しみを我々が理解する一助になっている」という一節を読んで、改めてそんなことを思った。

③ 溶けたラムネ瓶

1993年、長崎で開かれた原水禁世界大会に参加した砂川^{すなかわ}、奈井江^{ないえ}、上砂川の原水協(原水爆禁止日本協議会)の代表3名が、爆心地から約800mの地点に住んでいた上野真吾さんが所有していた被爆の遺品を、お孫さんから譲り受けた。ラムネ瓶は玄関の外に置かれていたそうだ。ガラスは比較的融点が高いものの、ラムネ瓶が一瞬でこのように変形してしまう原爆の熱線のすさまじさを感じ取ることができるであろう。空知や道内の各地で展示された後ノーモア・ヒバクシャ会館に寄贈された。



④ 焼けずに残った名札とお守り

原爆は核分裂の強大なエネルギーで建物と人間と自然を破壊した。自然科学者でもある日本被団協の代表理事田中熙巳^{てるみ}さんによれば、全エネルギーの50パーセントが爆風、35パーセントが熱線、そして15パーセントが放射線だという。

密集した家屋の類焼を防ぐため、あちこちに空閑地を作る建物疎開の動きは早くからあった。1944年の末から米軍の対日空襲が本格化すると、広島城地下には中国軍管区作戦室が置かれ、空襲に対する対策がとられた。8月6日、およそ8,200人の中学生が建物疎開作業を行うため広島市内の中心部に集められてい



た。崇徳中学校の1、2年生は八丁堀・白島方面で建物疎開作業にあたり直撃を受けた。生徒514人と教員7人のうち、生存が確認されたのは3人に過ぎないという。建物疎開では動員された全中学生の内約5,900人が亡くなったというから、死亡率は実に72パーセントにもなる。

展示してあるのは崇徳^{ちゆうとく}中学校1年の丸坂繁男くんの名札とお守りである。名札がほぼ無傷で残っている。説明文には「死者(学徒)の身につけていたお守り 俯せだったので残った」とある。丸坂君のことがもう少しわからないか、崇徳高校に尋ねてみたことがあったがわからなかった。

⑤ 貯蓄券

広島市の千田町に福原醸造というお酒、醤油屋さんがあった。爆心地から1,400mしか離れていない。原爆で建物は全壊、二次火災で全焼した。福原セキさんは愛用していた品々を掘り出しては避難した己斐に持ち帰って保管していたそうである。セキさん亡き後も非常持ち出し用の金庫等が回収された。それらが後にNHK旭川放送局に勤めていたお孫さんから会館に寄贈された。写真はその金庫から出てきた蒸し焼き状態の貯蓄券である。



日中戦争からアジア太平洋戦争へ、政府は増税と国債発行など、様々な方法で戦費を調達した。貯蓄債券は日中戦争の戦費調達を目的に1937年

に日本勧業銀行から発行された。償還の際には毎年2回の抽選で当選者に

は高額の割増金が付与されたという。1940年からは報国債券も発売された。福原さんが購入した貯蓄券を束ねた表面に注目してほしい。「米英ゲキメツ」と書かれているのである。一般の国民は様々な形で戦時体制に組み込まれ銃後を支えた。債券や貯蓄券を購入することもそのひとつであった。見学の際に見落とさず見てほしいひとつである。

⑥ 被爆者ののどをうるおした水筒

ここに展示してあるのは酒城繁雄さんの水筒である。酒城さんは暁部隊に配属され、宇品の向かいの金輪島で被爆者の救助にあたった。説明文には次のように書かれている。

瀬戸内海の島々は広島市街から運ばれた被爆者でいっぱいだった。その島のひとつ金輪島には約400名が収容されたが、そこから小屋浦の臨時野戦病院に移すことができたのは80人、後はすべて亡くなった。救護にあたった酒城繁雄さん(暁部隊船舶修理部)は言う、「水筒の水を口に含ませたが一回りしてくるともう息絶えていた」。復員後酒城さんは咽頭炎をはじめ様々な病気に苛まれる。1960年に北海道被団協(北海道被爆者協会の前身)を結成し、長く理事長・事務局長をつとめ、(後に)名前を無核と改めた。



救助を求める被爆者に、わずかの水を口に含ませたり声をかけたりする以外手当らしい手当は何もできなかった、という話は数多く残されている。

1954年のビキニ水爆実験で第五福竜丸が被爆したことをきっかけに、日本中で原水爆禁止を求める運動が燎原の火のように広がった。1956年8月5日、札幌市の西創成小学校で原水爆禁止北海道大集会が開かれた。酒城さんは言う、「西創成のグラウンドへ行って見たわけです。そしたら室内運動場の中へ、いっぱい人が入っているんです。……ところが…誰もが原

爆はこういうもんだとか、いろんなこというけども、自分が見たという発言をする人は一人もいないわけです。……それから話しはじめると、今度は当時のことがグーと目先にこう、出てくるもんだから何から話したらいいかわかんなくなっちゃって、本当、泣きながら訴えたわけですよ（酒城繁雄『被爆 30 年に憶う』北海道平和委員会、1975 年）。北海道で、公の場で被爆者が自らの被爆体験を語った最初かもしれない。

⑦ 首の折れたマリア像

長崎の被爆を物語る遺品は多くはないが、その中のひとつに首の折れた被爆マリア像がある。箱のフタの内側に「長崎被爆 マリアの像 寄贈者 三笠市久松信行代」と書かれている。久松信行さんの奥さんが、夫信行さんが亡くなった後この像を会館に寄贈したのである。

絵本『北の里から平和の祈り～
ノーモア・ヒバクシャ会館物語

～』（北海道新聞社刊、2020 年）は被爆マリアを抱きかかえて渡道した 5 歳のまり子を主人公にした物語である。2018 年の夏、作家こやま峰子さんが会館を訪れ、首の折れたマリア像にじっと見とれていた。おそらく絵本の構想を思い



描いていたのであろう。被爆マリアはなぜここにあるのか。そこに託された被爆者の思いとは……。こやま峰子さんが思いを込めてつづったノーモア・ヒバクシャ会館物語、そして藤本四郎さんの絵はいとおしくなるやさしさにあふれている。英訳したのは北星学園大学英文科のエバンズ・キアラさんと五十嵐夕夏さんである。

実際のマリア像の話は少し異なる。久松家は長崎の旧家、キリスト教信仰の家柄であった。以下の話は生前久松さんから聞いた話を近所の太田金物店の主人が語ってくれたことである。原爆投下のとき久松信行さんは海軍にいて、原爆投下の翌日に爆心地に入って救護活動に従事した。時にはブルドーザーで死体を片づけたこともあったという。その年の暮れになぜか単身函館にやって来て、やがて三笠に移った。三笠は炭鉱がさかんで 1955 年には 7 万人近くの人口があったという。久松さんは先山として働

いていた。「俺だって長くは生きられない」と言っていたそうである。結婚して子どもも生まれた。炭住に入っていたが退職してから街中に移った。久松家に行くと、仏壇とキリスト教の祭壇とふたつあったという。仏壇には小さな地藏さん、キリスト教の祭壇にはこのマリア像が置かれていた。教会にも通っていた。亡くなる時、奥さんや子どもたちには「お前たちは改宗したわけではないから宗教は自由にしていざ」と言ったという。被爆マリアを大事に抱えて北海道に渡った久松さんの思いはどんなだったろう。そして奥さんが会館に寄贈したときの気持は何だったろう。

この絵本の世界と被爆者の思いを次代に生きる子どもたちに届けたいと考え、1年かけて制作されたのがDVD「ノーモア・ヒバクシャの願いー絵本『北の里から平和の祈り』が語りかけるものー」(北海道被爆者協会、2023年)である。24分36秒の中に、子どもたちが考えるためのテーマがたくさん込められている。原爆のすさまじさと非人道性、本郷弦さん(本郷新さんのお孫さん)による絵本の味わい深い朗読、思いを込めた橋本登代子さんのナレーション。そして作者の思いと被爆者から若者へのメッセージ。



⑧ 蔵書、絵本の原画と被爆者の絵

ノーモア・ヒバクシャ会館の3階は図書室と研修室になっている。蔵書は約2,500冊近く、原爆、被爆関係の図書を中心に、道外各地のたたかひの記録も多い。原爆を初めて報じた『アサヒグラフ』(1952年)など貴重な出版物もある。館内での閲覧のほか貸し出しもしている。図書室の向かい側が研修室とよんでいる部屋で、50人ほど入れる広さがある。被爆者の話を聞いたり、DVDを観て学習したりすることができる。事前の届け出があればグループや団体の学習会も可能である。

壁面には様々な絵を掛けることが多いが、現在は絵本『北の里から平和の祈り』の原画を展示している。原画は貸し出しをすることもある。2022年8月1日から8月28日までは剣淵町「絵本の館」で原画展とこやま峰子さんの講演会が行われた。そのあと原画は名寄市立大学図書館で展示さ

れた。2024年に入って、7月2日から9月1日まで、遠軽町図書館を中心にオホーツク地方の4市町の図書館が絵本の原画展を開いた。

北海道在住の被爆者が描いた絵もある。辻口清吉さんは召集されて愛媛県三島町の陸軍暁部隊に配属された。潜水輸送教育隊、いわゆるマルユとよばれる特攻部隊である。その後広島宇品の宇品に転属、8月6日は直爆を受けながら負傷者の救助と死体の収容作業にあたった。そしてその惨状を絵に描き留めた（原画は広島原爆資料館にある）。つぶれた防空壕の中で泥水に埋まって死んでいた若い母子の絵、元安川の川面に浮く死体の絵など、淡々と描いているが切ない。

また福島から志願し、通信兵として広島市の暁部隊に配属になった服部十郎さんが描いた白黒の原画もある。服部さんはのちに被爆者協会の副会長も務めた。『被爆者の証言 第三集』の挿絵の多くは服部さんが描いたものである。服部さんは生前、青年たちを前にその時の状況を説明し、「私は死神かと思った」と



震えながら語った姿が忘れられない。なおこれらの絵は「被爆の証言と原爆展」などの際に展示している。そのほか函館の被爆者で版画家の平方亮三さんの作品もある。

⑨「原爆と人間展」パネル

被爆から半世紀余り過ぎた1997年、日本被団協は「原爆と人間展」パネルを作成し、国内のみならず国外にも広めた(英語、ロシア語、フランス語、イタリア語、ドイツ語の外国版があった)。第1部「今も世界で」、第2部「あの日 あの時」、第3部「苦しみ 怒り」、第4部「たたかい 生きる」の4部構成、計40枚である。2000年の時点で海外41か国100か所以上に普及されたと日本被団協の機関紙には書かれている。このうち日本生協連、各地の生協が36か国70か所に寄贈したという。

2017年、新しい編集の「ヒロシマ・ナガサキ 原爆と人間」のパネル30枚セットが発行された。第1部「あの日 あの時」、第2部「核被害の広がり」、第3部「ふたたび被爆者をつくるな」で構成されている。若い

人にもわかるようにと意識して解説がつけられた。福島原発事故なども入った。新パネルの内容をパンフレットにして頒布もしている。

ただノーモア・ヒバクシャ会館の展示に使っているのは「原爆と人間展」の旧パネルである。旧パネルは原爆のすさまじさ、悲惨さに重点が置かれている。「地獄」「うつろ」

「墓の中身は空っぽじゃ」「被爆者はモルモットか」などが新版にはない。呆然と立ち尽くす母親と後ろにころがる黒焦げの死体(「うつろ」)



は見るのもつらい。またA B C C(原爆障害調査委員会)のパネル(「被爆者はモルモットか」)はアメリカの立場と被爆の問題を考える上で必須のもののように思える。アメリカは1946年、治療ではなく放射線の人的影響の詳細を調べるため調査団を派遣した。今日の被爆者行政、被爆二世対策は、いずれもA B C C(現在の放射線影響研究所につながっている)のデータに依っている。

⑩ きのか雲のジオラマ

2022年から新たな展示物が加わった。札幌東陵高校の2年生有志15名が広島見学旅行の事前学習を兼ねて作成したジオラマ「もしも札幌駅上空で広島型原爆が炸裂したら」である。

同校の学校祭で展示され、ついで被爆者協会と二世プラスの会主催の「被爆の証言と原爆展」で展示されて大きな反響をよんだ。その後会館に寄贈された。

きのか雲の大きさ、被害の状況等、今日明らかになっていることを正確に踏まえて作成されている。もうもうと立ち昇るきのか雲、なぎ倒されたテレビ塔、半径2km以内がほぼ壊滅状態になっているジオラマを見て、見学者は



原爆の威力をリアルにつかむことができる。

戦後 80 年、かつての戦争や原爆の記憶が遠くなっている時代に、高校生がこれを作った意義を受けとめたい。感想ノートには「今まで抽象的に理解していた原爆の威力を、自分がよく知っている街にあてはめることで、より具体的に理解できました」「すばらしい！『自分達の身におこったら？』と考えそれを見える化する。この若い感性で核も戦争もない世界のため、これからも発信し続けて下さい」などと記されている。

ノーモア・ヒバクシャの願い

1968 年 7 月 8 日、4 回目の原爆死没者北海道追悼会(当時は慰霊祭の名で寺院で行われていた)が開かれていた。その中に 39 歳の時広島で被爆し網走の奥、東藻琴^{ひがしもこと}の東洋に開拓民として入植した定安正己さんがいた。開拓は過酷な日々の連続だった。その定安さんが、式後の交流会の場で「被爆者が気がねなく悩みを語りあいゆっくり憩える場所がほしい」と話した。これが被爆者の「いこいの家」構想として被爆者や支援者の中に広がっていき、冒頭に述べたノーモア・ヒバクシャ会館建設運動へとつながっていく。

政府の統計によれば、2024 年の 3 月末時点で北海道には 185 名の被爆者がいる。平均年齢は 86.48 歳になる。被爆者とは国が被爆者と認定した人たちである。実際に被爆した人たちはもっと多いと思われる。

被爆者は 4 つに分けられる。1 号被爆者は直接被爆した人たち、2 号被爆者は被爆後の街中に入って二次被爆をした人たち（入市被爆）、3 号被爆者は救護被爆者、被爆者の救護や死体処理に従事して被爆した人たち、4 号被爆者は被爆時にお母さんのお腹の中にいた胎内被爆者である。

北海道在住の被爆者は他の県と比べても相対的に多い。北海道に被爆者がいるのは、①親戚や縁故をたよって、②結婚や就職・転勤で、③兵隊で広島に行っていて被爆し北海道へ、④数は多くないが戦後開拓で北海道に入った、等々の事情による。この中で、③のケースが多いから北海道に被爆者が多いのだと言われてきた。確かに北海道出身で宇品に司令部のあった暁部隊にいて被爆した者は少なくない。ところが個々のケースを見ると③は北海道出身者とは限らない。福島、秋田、新潟など東北出身者も目立つ。

北海道に被爆者が多いのは別な事情がかかわっているのかもしれない。

定安さんはそもそもが広島出身、④のケースだが「(原爆がなければ)こちらには来ていなかったでしょう」と言っている。久松さんは長崎出身である。結婚して北海道に来た女性(越智さんではない)が「私は被爆してなければ北海道には来ていない」とも書いている。晩年「私は逃げて、逃げて、逃げて、北海道に来た」と語った退職教員もいた。つまり、あの忌まわしい記憶を忘れたい、広島、長崎から遠く離れたい、どうせ苦勞をするなら新しい北海道の地でという気持がいま述べた4つの事情にオーバーラップし、北海道の被爆者を多くしているのではないだろうか。

会館には多くの市民が、団体や個人で、時には親子や家族で来館する。また小学生から大学生までがしばしば学校やグループ単位で訪れる。来館者は展示を見学し映像を視聴し被爆者の証言を聞いて、ふたたびあのような愚かなことを繰り返してはならないとノートに記している。そして被爆者は、自らの被爆体験を来館者に語り、外に出て生徒や市民に語り、再び被爆者を作ってはならないと訴えてきた。とりわけ札幌市が市の小中高に被爆者を派遣している事業の意義は大きい。ノーモア・ヒバクシャ会館のオープンから2024年3月末まで、カウントできている数で来館者は45,603名、被爆者が外に出て語る被爆体験を聞いた人たちは121,819名、合計で167,422名に上る。

北海道ノーモア・ヒバクシャ会館は、被爆者の活動と交流の場であり平和の発信基地でもあった。それと同時に、市民・学生・生徒、子どもたちの平和学習の場として33年余の歴史を刻んできた。

被爆者の訴えが「核のタブー」をゆるぎない国際規範にした、とノーベル平和賞の授賞理由はいう。しかしいま、核兵器使用の危険はかつてないほど高まり、「核のタブー」は大きな試練に立たされている。高齢のために被爆者はそう長く語ることはできなくなってきた。そうであるならば、私たちは記録された被爆者の証言や残された遺品が物語る被爆の世界を学びとり、新たな語り手として平和の大切さを伝えていかなければならないのではないだろうか。

(きため くにお 北海道被爆者協会事務局次長)